

新建築

SHINKENCHIKU:2008

5



ニューヨーク・マンハッタン、ミートパッキングエリアにつくられたyohji yamamotoの店舗。南のガンスヴォールトストリート側を見る。既存の煉瓦造の平屋を改修してつくられた。三角形の敷地は14st.8Ave.交差点近く、北側のチェルシー、南側のソーホー地区に挟まれ、近年店舗が増えている。この通り側は既存のファサードをなるべく残している。



yohji yamamoto New York gansevoort street store

設計 石上純也建築設計事務所

設計協力 RALPH SOBEL ARCHITECT

施工 JEPOL CONSTRUCTION

所在地 アメリカ合衆国ニューヨーク市

YOHJI YAMAMOTO NEW YORK GANSEVOORT STREET STORE

architects Junya Ishigami & associates

RALPH SOBEL ARCHITECT





南西側より見る。建物の一部を切り取ることでつくられた新たな通りに入り行き交う。建物の内部は、右側にショップ、床瓦は既存のものまでできるだけ残している。元の建物の近づくにつれて、左側が既存の壁、右側は既存の壁を削り出したガラスを嵌めた。



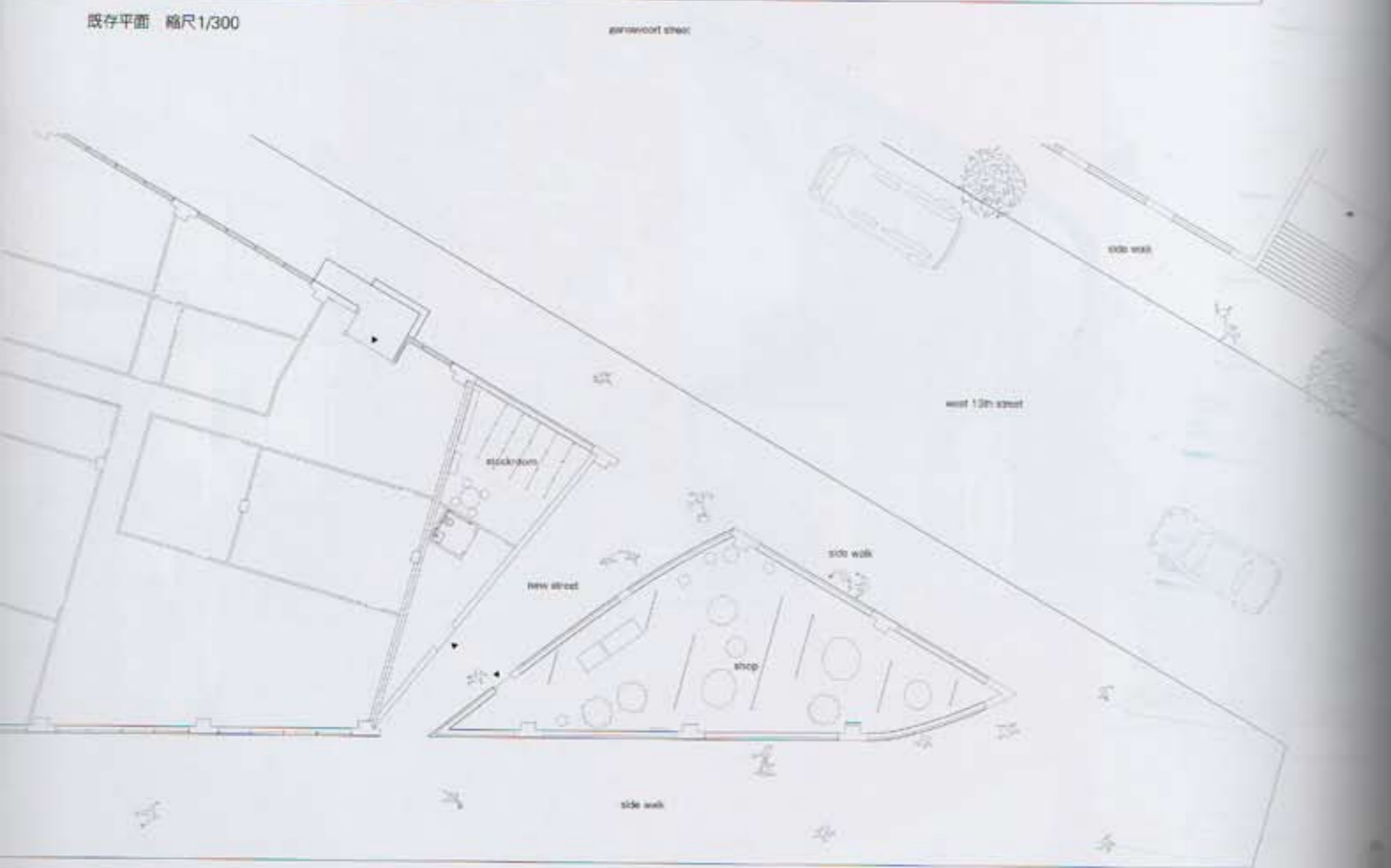
高層ビルに新たなコーナー。右にガンズワールドストリート、
左に新しくつくられた三差路。軒高約5,190mm、窓台は約1,250mm。



東側コーナーは曲面状に煉瓦壁を積み直し、連続する曲面の壁としている。地面に残る煉瓦積跡の三角部分が既存建物のかたち。三差路の印象を変えている。



既存平面 縮尺1/300



平面 縮尺1/300



断面 縮尺1/300

高さを見下ろし、三角形の煉瓦積み既存建物から先端と真ん中あたりを切り取った。奥に隣のテナントが繋がる。



設計 建築 石上純也建築設計事務所
 設計協力 RALPH SOBEL, ARCHITECT
 構造 ENGINEERS NETWORK
 監工 JACK STONE ENGINEERS
 施工 JEPOL CONSTRUCTION
 敷地面積 253.9㎡ (2,734sf.)
 建築面積 187.6㎡ (2,021sf.)
 延床面積 187.6㎡ (2,021sf.)
 階数 地上1階
 構造 煉瓦造(既存壁) 煉瓦造一部鉄骨造(新規壁)
 木造一部鉄骨造(屋根)
 工期 2007年7月~2008年1月
 撮影 石上純也建築設計事務所
 *Iwan Baan
 (データシート199頁)



独立したボリュームの東側コーナー。雪で外部の通りが等価に連続する。店舗は右のストックルームから左のショップへと、新たな通りを行き来する。



店舗空間について

山本耀司(デザイナー)

「服だけあればいい」、という言葉空間に移しこむようシンプルでミニマル、一見ガランとした店舗開発を長年続けてきた。きらびやかな内装や什器といった視界を感ずるもの、時としてごまかしとなるもの一切を排除し、服だけが生きる、または真に服だけを見せる店というのがヨウジヤマモトのショップの基となっている。かねてからヨウジヤマモトが求めてきたデザインをしないというデザインの店内空間は、服そのものが生きる、人と服の関わり合いの原点である。

建築家石上氏について

例えばひと目見て誰の作品かが分かるような、周りの景観とかその雰囲気やぶち壊すような、よくある「建築家のエゴ」がない、彼が最大のエゴを発揮

ふるい建物と道

石上純也(建築家)

古いものから新しいものをつくり出す可能性

僕は、もともと古い建物から新しい建物を考えることに興味があった。古いものが持つ情報量の多さというか、捉えどころのないかわいらしさというか、僕たちでは到底つくり出せない空間の豊かさに惹かれていたのかもしれない。何も無い土地に建築を考えると、建築が既にあってそこから新しい建築を考えていくことにはどのくらい違いがあるのだろうか。

ヨウジヤマモトのフラッグショップの設計である。敷地はニューヨーク・マンハッタン・ミートパッキングエリアにあって、そこには既に築50年ほどの古い煉瓦造りの三角形平面をした797m²の平屋の建物が建っていた。その先端の一部(253.9m²)のエリアを改装することになった。既存の建物は、ふたつの通りに挟まれるように建っている。この建物によって、街の中に三差路がつくり出されていて、そのことにとっても興味を惹かれた。歩いてきた街路を左右に分割して、左に行く場合と右に行く場合とでまったく異なる空間体験をすることになる。街の中でこれほど明確に空間を切り替えるシステムは他にはなかなかない気がする。このダイナミックな外部空間の変化を、今回の計画に取り入れたいと思っていた。3つの街路に囲まれた三角形の建物をつくることによって、3つの三差路を建物の回りにつくり出すことにした。

するポイントは人が気付かない所、理解不可能な所にある。3.5次元あるいは4次元に、言うべきか、そこに異常にこだわる。「何なんだこれは?」と思わせるような、実験的であり未来的であるにもかかわらず、彼の建築に触れる人びとの心をかき乱すようなことがまずない。人の生理に暴力的に突き刺さるものでもない、非常に挑戦的なにもかかわらず、引き算されている。普通、引き算されているものには退屈なものが多いが(例えば、Simple is the bestみたいな)彼の生まれながらに持っているセンスのよさのおかげでそれが成功している。長年いろいろな建築家を見てきたが、石上さんに感じたことは、「まだ若いので、これからどれくらいすごい建築家になるのだろう」ということと、「自分のイメージーションを実現するためにはとにかく諦めない」ということ。例えば、今日東京にいて、先週ニューヨークで組み立てたひとつの煉瓦が少しずれていることに気付いて、気になるから次の日にまたニューヨークに行く、とか、そんなことまで? って思うような所にまでとにかくこだわる。創作について生まれながらの動物的意欲を持っている。

建物を切斷すること

既存の建物は三角形のケーキのようなかわいらしい形をしていたので、ケーキをカットするように新しい形をつくった。建物をカットすることによって、き上がる新しい空間のヒエラルキーから、新しい街のアクティビティが生み出されるとよいと思っていた。とはいっても、実際に建物を切るということは、結構難しい。できるだけ、既存の構造に負担をかけないように、カットする部分は、大梁を跨がずにフンスノンの中で行い、先端の小さくカットした部分はなるべく既存の梁を活かすようにした。煉瓦造りだったので、崩した壁の煉瓦は、ブロック遊びをするように、再利用して新しい形に組み換えていった。もちろん、足りない部分に関しては、新しい煉瓦を多少使っているが、こうすることによって、まったく新しい形の建物ができ上がっているにもかかわらず、どこか今までと同じにも見えるような不思議な存在感になった。ただそれは、そういう素材の雰囲気からだけではなく、カットしたことによって、き上がるふたつのボリュームと、既存の建物を持つ全体性との関係についていろいろスタディした結果だと思う。

カットによってできる新しいボリューム

ショップの部分は、既存の建物から切り離してただ単に商品を並べるだけのスペースにした。バックヤードは後ろの建物に残して、ショップからは切り離している。リノベーションではあるが、間仕切り壁などで単にインテリアの中だけでプランを考えていくものとはまったく違った空間ができたと思う。中と外を同時に作りながら空間をつくっていった



全周が外部に面し、街が背景となる。什器設計も石上純也建築設計事務所による。

ので、どちらかという新築の建物を設計している感覚に近かったように思うけど、建物は既にそこにあったので、そういう意味ではやはり、新築の設計とも全然違っていた。その多重性の中で設計していたのだと思う。そのようにして、つくり出されたボリュームは、あるところから見ると、どこを切斷したのかがよく分からないし、また、あるところから見ると、まったく新しいふたつのボリュームができて上がっている。ガンスヴォールストリート側は、静かな通りだったので、なるべく既存のファサードの連続性をそのまま残したいと考えていた。大きな切り込みは極力避けて、小さな路地が大通りにちよこんと接続されるようにして、先端部分はそのファサードをさらに伸ばすように湾曲させて、既存のファサードの長さを強調した。13丁目通り側は、わりと、賑やかな通りだったので、少しダイナミックに街並みを変化させた方がより効果的だと思った。既存の歩道と同じくらいの幅の大きな切り込み

をファサードに斜めに入れて、切離された新しいボリュームと残されたボリュームとをはっきりと分けることを考えた。直交グリッド以外の方向性を持った街路をつくることも、独立した建物をつくることも、ニューヨークの街中ではすごく効果があることだと思っていた。ニューヨークの街の中でフラットライアンビルやタイムズスクエアのような場所は、とても魅力的な場所だと感じていたので、そういうアクティビティを今までにないスケール感と透明性の中につくり出したいと思っていた。道幅が変化する小さくてかわいらしいブロードウェイのような路地が既存のふたつの通りを繋ぐことになった。

新しい街角とインテリア

切離されたボリュームのつながった部分にある3つの三差路が、街路空間をスイッチのようにばらばらと切り換える。路地から突然大通りに人が飛び出したり、大通りの流れをふたつに分断したり、大通

りと路地をゆるやかに切り替えていったりというように、さまざまな人の流れがつくり出される。全てのファサードは街路に面していて、ショーケースのように中の洋服がいろいろな角度から眺められるので、街路からの視線がさまざまに交錯する。また、とんがったコーナーに行くほど、中と外の関係性は、限りなく近くなる。三角形のプランが内側と外側を自然に混ぜ合わせる。中と外、見るごとに見られること、それらがどちらにでもなり得るような、そんな状態が生まれていると思う。インテリアはあえてほとんど手を付けずに、天井を貼って、窓枠を取り払って枠のないきれいなガラスを嵌め込んだだけである。外部空間や街のアクティビティを変化させるだけで、その空間が内側に取り込まれて、豊かなインテリア空間につけていくのだと考えていた。

やわらかい新鮮さ

古いものと新しいものを同時に考えることは、森

の中に小さくてきれいな庭をつくることに近い気がする。どこからがもともとそこにあったもので、どこからがつくりだされたものかはよくわからないが、確実にその場所を美しく変えていくような、そんな感じである。そういう状態の中では、「新しいもの」という価値観自体が変化していく気がしていた。そもそも、新しいものは、古いものとの関係性の中で成り立っているのだと思う。たぶん、それ自体は変わらないと思うのだけど、その関係の仕方が「新しくつくられるもの」ともともとそこにあった古いもの」というはっきりした区別としてあるわけではなく、新しくつくられるもの自体の中にも、もともとそこにあった古いものが含まれるという、すごく複雑で繊細な状態の中で認識することになるのだと思う。そういう中では、新しさははっきりした何かというよりは、細やかで繊細な混ざり合いの中で成り立つ、とても曖昧でやわらかい新鮮さとして現れてくるのだと思った。